

4. 調査の成果

- ・ 県内最大規模（復元値）の竪穴住居を確認

調査区東南端で円形の特大型竪穴住居を検出しました。調査区内には全体の1/3ほどしか入っていませんが、柱配置と平面形から復元すると、直径11.5mになります。面積にすると103㎡で約63畳分の広さに相当します。これは、高知県内でこれまで調査された竪穴住居の中では最大規模のものです。

壁際にはベッド状遺構とよばれる床の一部を若干高くした施設を地山を削りだして作っています。

この住居が廃絶された後には、20cm程の河原石が多量に投げ込まれており、石の上面では完形の土器が押しつぶされた形でいくつも出土しました。住居を離れる際にお供え物などを入れていたのでしょうか。

- ・ 13棟の竪穴住居を確認

今回の調査では13棟の竪穴住居が確認できました。いずれの住居も出土した土器から弥生時代後期終末頃のものと考えられます。南側で見つかっている住居は少しずつ場所を変えながら何度か建て替えを行なっています。ほとんどの住居の平面形は隅丸方形で、一辺が2m～5m程と様々な大きさのものがああります。

この時期の竪穴住居は大型のものがみられるとともに、小型のものも多く検出される傾向があり、住居の大きさが多様化します。

- ・ 河内平野から運ばれてきた土器が出土

竪穴住居の中から庄内式土器とよばれる河内平野から持ち込まれた土器が出土しました。県内では庄内式土器は高知平野を中心に約20遺跡で出土しており、畿内との関係性を物語っています。

5. おわりに

今回の調査では、主に弥生時代終末期の遺構・遺物を多数検出しました。

弥生時代初めから後期には香長平野では田村遺跡群に多くの住居が営まれ、後期初めには最盛期を誇っていましたが、弥生時代終わり頃には田村遺跡は衰退の一途を辿ります。今回見つかった西野々遺跡の住居群はそうした時期のムラの一つと考えられ、古墳時代に入る手前の高知県の社会情勢を窺い知るための貴重な資料といえます。今後、当時の集落像を復元するための重要な資料として出土した資料を整理していきたいと思ひます。

調査にあたっては、多くの方々にご支援・ご協力を賜りましたことを厚く御礼申し上げます。また、今後とも文化財調査へのご理解・ご協力をお願いいたします。